

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎25

医学博士・医学ジャーナリスト 植田美津江

回転寿司という文化

今や女性にとって職業の壁はほとんどなく、どんな仕事にも挑戦できる社会になりつつあるが、そうはいっても、個人的にやはりこれは男性でないと……と思う職業もいくつかある。

たとえば、寿司職人がそう。店に足を踏み入れた途端に、威勢のいい「らっしゃい！」の掛け声はなんとと言っても男性にふさわしいと思う。寿司社会も昔のような「職人」が育ちにくくなっている

司は随分身近な食べものになった。昔は、寿司は特別な日に食する高級な食べ物であった。今でも店によってはそうなのだろうが、気楽に入れる回転寿司の味も充分満足できる時代である。

と聞くが、せめてそれらしい雰囲気は残しておいて欲しいものである。回転寿司の登場で、寿

手次第ではそれも恥ずかしい。

回転寿司も同じことがいえる。皿にのっている寿司を値踏みしたり、流れる皿のどれを取ろうかと考えたりするのに気がとられ、会話も後回しになってしまふことが多い。

デートに向かない
食事として、



食べたいものがないときは、直接注文できるのだが、そのタイミングは結構難しい。頼もうとした矢先に、見知らぬ人が同じものを注文かけたりしたときの気持ちはなんともいえない。すぐに注文するのもシヤクなので、お茶など飲みながら次のタイミングを待たねばならない。

ひとりで来ている人はもちろん、カップルの人も黙々と皿を眺めながら食べている様子を見ると、蟹同様回転寿司もデートには不向き。若いカップルではなく倦怠期の夫婦向きといった感じである。

立ち食いソバのような感覚なのである。そういう人がいると、わざわざ注文する気概が薄れ、流れでくる寿司を黙って取らざるを得ない気持ちにもなってくる。

高く積み上げてゆっくり食べている人もいる。周囲に誰もいないかのよう

回転寿司は、新鮮なネタはもちろん、きびきびとした威勢のいい寿司職人があってこそそのもの。皿にのってくる回る寿司を気兼ねなく食べる場には、やはり男性職人がふさわしいと思うのだ。